

日本地衣学会 No.51

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信	177
	雲南地衣類調査行2005(その3) / 原田浩	177
	会務報告	180
	日本分類学会連合第4回総会報告 / 岡本達哉	180

会員通信 From Members

雲南地衣類調査行 2005 (その3)

元陽では棚田の周りで樹花(カラタチゴケ)を見つけ、レストランではこれを食べることができた。有名な棚田の全貌を見ることができなかったのは心残りだった。しかし、それでも緑春に向かう途上では棚田を各所で見るようになった(図1)。名も無い棚田でさえもこれほどな

のだから、有名な元陽のは、さぞすごいのだろう……。

* * *

話は変わるが、雲南で入手した書籍が、つい先日、航空便で到着した。その中にある道路地図帳を見てみると、先に提示した調査ルート(本誌50号173ページ、図1)

が少し違っていただけで訂正したい。修正箇所は、今回の話題となる緑春 Luchun に滞在したときのルートで、本誌50号の地図では李仙江の本流に沿って南下しているように示したが、本号の図2にあるように実際は李仙江の支流のひとつに沿っていた。



図1. 元陽から緑春に向かう途上に見た棚田。畦が等高線のように見え、何とも美しい。



図2. 調査ルート。前回は元陽，今回は緑春の話題。



図3. 李仙江の支流。淡水生アナイボゴケ科を調査するには打ってつけだった。

緑春 Luchun にて

霧深い峠を越えしばらく行くと棚田が現れ、まもなく緑春の街に至った。ここも、先の元陽の古い街と同様に、山の上、稜線にあった。ここ数日來の異常な寒波が和らいで来たのか、陽も射すようになり、隣接する山並も見えるようになってきた。

我々の宿は町の中心ではなく、東の端のほうに位置する「柳東賓館」というところだった。「柳東」という字は、現地では Luchun と発音するのだという。王さんの知り合いの地元の役人が紹介した宿である。地元政府が運営する、随分立派なホテルだった。

さて、その役人達とは、例に漏れず宴会となった。メニューは犬鍋。これには我々は苦い思い出があった。大

田山の保護区の管理処のスタッフ達との宴会のときもそうだった。ただ、そのときは相手方の人数が 20 人以上の忘年会(?)であり、次々と白酒(焼酎の一種)の乾杯を迫られたのだった・・・それ以上は語るまい。

緑春の宴会の成果として(?)、翌日は管理処のスタッフの一人が道案内をしてくれることになった。緑春県には黄連山自然保護区があり、その中で私の調査に最も適した場所に案内してくれるというのだ。

緑春からひとしきり車を走らせた後、幹線道路からはずれ、山を越え、李仙江の支流の一つに沿って下って行った。すると、道の真ん中に路線バス(?)が立往生しているのではないか。修理が終わるまで、止む無く、溪谷で調査をすることにした(図3)。・・・が、これが幸いした。どこか日本の溪流を見るようである。水は澄み、川岸の岩にはアナイボゴケ科がたくさん生えている。河畔の地衣類を調査するには最適な場所だった。

一時間も経っただろうか、道路に戻ると、そこにバスもジープもなかった。バスは 200mほど先(下流側)で再び立往生していた。今度は崖崩れに行く手を阻まれていたのだ。私が乗るジープは既に方向転換をして 100mほど上流側で待機していた。崖

崩れでは仕方が無い。当初の目的地をあきらめて、来た道を帰ることにしたというわけだ。（前回の調査でもこのような行き止まりは2度あったな。）

緑春に帰る道、標高が高くなると周りの木々に大型地衣が目立ち始めた。このうち幾つかを紹介しておこう。

まず図4はツノマタゴケモドキ。既に本誌49号p.171で話題にした種類だ。日本では関東以西の山地から記録があるが、極めてまれな種類である。いっぽう、雲南ではどこにでもといったら嘘になるが、それほど普通の種類である。この図にあるように樹幹に着くこともあるが、枝先にもよく着く。細い線形の裂片が等長二又分枝し、斜上するのが特徴的である。ちょっとフクロゴケ属 *Hypogymnia* に似た感じがする葉状地衣である。フクロゴケ属では多くの種で、裂片が膨れストロー状に空洞となっているのに対し、ツノマタゴケモドキでは、腹面が楯状に凹んでいるので簡単に区別できる。

次に図5は、*Cetrariopsis wallichiana* である。日本にもあるレモンゴケ *Nephromopsis pallescens* に似ているが、子器が地衣体裂片背面に散生するので、縁だけにつくレモンゴケとは異なる。

その他にも、図5の左下のほうに写っている、ハナサルオガセ *Usnea orientalis* もよく見られた。日本の暖温帯でおなじみのウメノキゴケを、ここを始め多くの場所で見たくとも印象深かった。（つづく）

（原田 浩：千葉県立中央博物館）



図4. ツノマタゴケモドキ *Everniastrum cirrhatum*. 日本では極めてまれだが、雲南ではごく普通種。



図5. *Cetrariopsis wallichiana*.

会務報告 Reports from the JSL Activities

日本分類学会連合第4回総会報告

2005年1月8日(土)、日本分類学会連合の第4回総会が国立科学博物館分館(新宿)において開催され、日本地衣学会からは岡本が代表者として出席した。

総会では、まず日本蘚苔類学会の出口博則氏を議長に選出し、昨年度の活動に関する報告が各担当者より行なわれた。その内容は、ジュンク堂書店池袋本店での宣伝イベント、ニュースレター、ホームページ、日本産生物種数調査、タイプ標本データベース、メーリングリスト、および、第3回シンポジウムの出版の7件であった。

引き続き予算と本年の事業計画等に関する審議に移り、2004年決算・会計監査、2006年のシンポジウム、ニュースレター、ホームページ、日本産生物種数調査、タイプ標本データベース、分類学者データベース、メーリングリスト、2005年度予算、および、会則の改正の各事項を審議の上承認した。また、日本鞘翅学会・日本魚類学会より、特定外来生物(オオクチバス・セイヨウ

オオマルハナバチ)の指定について、意見書を環境大臣宛に提出することが提案された。検討の結果、意見書は日本魚類学会自然保護委員会に作成を一任し、分類学会連合から提出するとともに、自然史学会連合からも同様に提出するよう働きかけることが承認された。

8日の午後からは、第4回公開シンポジウム「種の違いをどのように見分けるか: 生物を種の単位で見よう」が催され、6題の発表とそれに関する討論が活発に行なわれた。会場は用意された席が足らなくなるほどの盛況で、生物の分類や多様性に関心を持っている方が多いことを、あらためて感じさせるものであった。シンポジウムの要旨は連合のホームページ(<http://www.bunrui.info/>)に掲載されている。なお、第5回公開シンポジウムは、2006年1月7日(土)13:30より「ミドリムシは動物?それとも植物?: 原生生物の不思議な世界」と題して開催の予定である。

(岡本達哉: 学術交流委員会)

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌42号148ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 42, p. 148 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 51号

発行日: 2005年 3月 15日

編集: 原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄

発行者・発行所: 日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2005 日本地衣学会 (© 2005 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。